

田中隆尙撰集

第九卷

田中隆尙撰集 第九卷

平成十八年七月十五日印刷
平成十八年七月二十五日發行

著 者 田 中 隆 尙

發行者 唐 澤 明 義

發行所 展 望 社

郵便番號一・二・二・〇〇〇二
東京都文京區小石川三・一・七
エコービル二〇二
電 話 〇三(三八一四)一九九七
FAX 〇三(三八一四)三〇六三
振替〇〇一八〇、三、三九六二四八

印刷・壯光舎印刷／組版・エムツークリエイト
ISBN4-88546-153-7

紀
行
一

目次

いたりあ行旅

正篇

.....七

續篇

.....四五三

編集覺書

.....六五四

いたりあ行旅

正篇

昭和四十年二月二十六日 土曜 往路

船が波止場から離れると直きに濃い霧のために見送りの人々の姿が見えなくなり、私は自分の船室に入つた。私は出發にあたつて人に知られず立たうと思ひ、出發の日時を誰にも告げずにゐたが、止むを得ぬ爲事の受繼ぎのために一人告げ二人告げてゐる中に、極く親しい少數の知己の間にひろまり、數人の人々が遠路を波止場まで見送りにきてくれてゐた。しかし今はかういつた人々に應待するのも臆劫なほどに病狀に悩まされてゐた。

私は昨年末から皮膚炎で入院し、その後症狀が蕁麻疹に變化し、最近全身に蔓延して最惡の状態になり、一昨日まで病院の一室に入院してゐたので、病室を出て外界で生活することさへ困難であつた。それなのにただ豫約してあつた出發の期日が到來したといふだけで、云はば強制的に退院させられ、この船に乗込んできたのである。今私のいだいてゐる一縷の望みは、一等船室は一人部屋なので、晝間から浴衣一枚になつてゐれば病室の繼續のやうなものだと思つたことであつた。それに病院の醫師が私の旅行は船や汽車や飛行機を使つて一週間も費して口オマにゆくといふことを聞いて驚き、特別

處置として強力の副腎皮質ホルモンを多量に處方してくれ、それを一昨日から服用してゐるので、その効果がやがて現れるだらうといふことであつた。しかしどういふものかその期待はまだいつかう實現しない。その上一人部屋のはずの一等船室に寢臺が上下二段になつてゐるので、船客がもう一人今にも現れるのではないかと思つて、それが不安である。しかしそんな不安も荷物を整理してしばらく経つても誰も來ないので、これは船客が少ないために一人で占領することができたのではないかと思つて解消した。

船室の卓の上の紙片に中食は十二時半よりと書いてあるので、十二時半少し前に船尾の方に歩いて行つて階段を下り、階下の食堂の方に行つた。途中で日本の若い女性二人と出會ひ、一緒に食堂の入口のところに来て中を見ると、まだ誰も入つてゐない。時間を間違へたかと思つて時計を見直したが、十二時半になつてゐる。そこに外國の青年が一人降りてきて、やはりまだなのかといつた顔をして歸つて行つた。私も諦めて歸つて行かうとすると、二人の女性は時間だからいいんでせうと云つて、扉を押して中に入つて行つた。私もそれについて入つた。すると中で立働いてゐた女給仕が「どうぞ、どうぞ」と日本語で云つて、私の食券を見て、左側の一段高い床の上の卓に導いて行つた。私がその卓につくと間もなく、私の隣に若い日本女性がつき、向ひ側に日本人男性二人が掛けた。女性はハンブルクの旅館の受附に就職口がきまつてゐるといふことで、男性は一人はスペインに働きにゆき、一人は慶應の學生でヨオロツパ旅行に行くのださうである。

卓には鉢に黒パンが盛つてあり、各自の前にソセイジ、チイズ、胡瓜などの前菜がおいてある。そ

こに女給仕が皿を配つて眞紅のスウプをついで行つた。それは異様な赤い脂が浮いてゐるものであつたが、飲んでみると見かけによらず淡泊な味であつた。次に冷肉に御飯を少し添へた皿が出た。最後にアイスクリームと珈琲が出た。

食後船室に歸つて荷物を整理し、洋服を着たまま寢臺に横になり、午睡をしようとしたが寢つかれない。しかし起きて何かするほどの元氣もないので、うとうとしてゐると、船室の壁の放送口からロシア語の放送が聞え、次に外人訛の抑揚の日本語で、「第一組の船客のみなさま、ただいまお茶の時間ですからレストランにおこし下さい」といふ放送が聞きたれ、次に英語でおなじことを云つてゐるのが聞えた。

私は中食を先ほど食べたばかりと思つたが、とにかく起きて食堂に行くと、客はまばらにしか來てゐない。卓にはパンと菓子と紅茶が出てゐるが、私はまだ食べる氣もしないので紅茶だけ飲む。隣の女性が「皆そろそろ船に酔つてきたのでせう」と云ふ。それを聞くと、食欲がないのは自分も酔ひはじめたのかも知れないと思ひ、さう思ふとなるほど自分も氣分がわるい。私は急いで船室に歸り寢臺に横になつた。

暫くして試みに起上らうとして却つて完全に船酔にかかつてゐることを知つた。その上全身の蕁麻疹の癢痒感が耐へがたく、洋服と肌着を脱ぎ浴衣に着替へて寢ようと思ひ、寢臺から立上ると、その瞬間吐出しさうになつて、衣服を着替へるといふ簡単な作業でも今は完全に實行不可能に陥つてゐるのを知つた。止むを得ず洋服を着たまま臥床したが、さうすると蕁麻疹の癢痒感が波狀的に全身を襲

ひ、風を入れるために上衣を脱がうとすると嘔吐の衝動が口をついて出てくる。これでは船室が病室の繼續どころではない。そしてこの一人部屋の船室でさへこのやうに耐へがたいとすると、ナホトカに着いてからの汽車や飛行機の中で横になることもできず、言葉も通じない相客の中に坐して幾日も過して萬里の道をゆくことはとてもできることではないといふ危懼が湧いてきた。病人はやはり病院の一室にゐるべきであつた。あの病室に海を越えて一飛びに飛んで歸することはできないか。それが現實に不可能なら、ナホトカに着いても下船せず、この船でふたたび横濱に歸することはできないか。いやこの船の歸りは半月先だらう。そんならナホトカから日本へ歸る飛行機はあるまいか。いや無い。そんならロオマまで行つて、ロオマからすぐ飛行機に乗つて歸らう。熱に浮かされたやうにそんなことを思ひめぐらしてゐる中に「ウニマニヤ」といふ言葉で始まるロシア語の放送があり、ついで日本語の放送で七時半の夕食の時間になつたのを告げ、又その後暫くしてサロンでソ聯の映畫を上映するといふ放送があつた。それから浴衣に着かへようとして嘔吐して中止し、そんなことを何度も繰返した後、やうやく着替へて寢臺に寝ることができた。

二月二十七日 日曜

朝になつても船酔はなほらないので、寢臺に寝たままでゐると、九時頃扉を合圖して女給仕が入つてきた。私はロシア語の勉強のために出發前一ヶ月をあててゐたのに、イタリア語の勉強が長引いてロシア語の方はとうとう本を見ることができず、乗船してから勉強しようと思つて本を持つてゐた

が、船酔に陥つてしまつて開くことができない。そこで今入つてきた女給仕に何と云つたらいいか分らず、咄嗟に上半身を起し手をふつて、船酔にかかつてまだ起きることができないといふことを表現しようとした。ところが相手はこんなことには馴れてゐると見えて、私の手ぶりに軽くうなづき、嘔吐した器を掃除し、紙屑を拾つて外に出て行つてしまつた。

そのあと朝食の案内も、中食と三時のお茶の案内も寢臺の中で聞き流し、四時頃になつて氣分がよくなつたので、洋服に着替へて甲板に出た。船はちやうど津輕海峽を通つてゐて、津輕の山々は雪山と雪の消えた山々が交錯し、右手はるかかなたに北海道がかすんで見えてゐた。海は濃紺色のあららしいうねりが立つてゐたが、白波はそれほど立つてゐず、風も思つたほど寒くなかつた。間もなく北海道のかすんだ山のむかうに雪で眞白な山が現れてきた。

今日は副腎皮質ホルモンが奏效してきたのか、蕁麻疹の方は朝からあまり生じなかつたが、甲板で潮風にあたつてゐる中に、それに刺激されたためか、ふたたび生じはじめたので急いで船室に歸り、七時半の夕食の案内を聞いた後に食堂に出て行つた。

同卓の慶應の學生と女性とが私の姿を見てほつとしたといふやうな顔をし、食事に來ないので心配した、もうよろしいのかと云ひ、女性の方は昨日の夕食は食べたが、その時食堂に姿をあらはした客はわづかにすぎず、その後自分も嘔吐して、やはりこの夕食から食べ始めてゐると云つた。食事は前菜、コンソメの次に魚フライと野菜が出たが、私はまだ全部食べられるほど恢復してゐない。慶應の學生がヨオグルトを特別に注文すると、女給仕がヨオグルトをコップにいっぱい入れて持つてきた。

日本で食べ馴れてゐる小瓶のものの何倍もあるので私は一驚したが、學生は一口食べて「あゝすつばい、こんなもの」と云つて顔をしかめた。しかしこれが純粹のヨオグルトで、後日私はイタリアで飲み、又歸途このおなじ船で注文して飲んでそれを知つた。日本で雜ぜもののヨオグルトばかり食べてゐて感覺の標準が狂つてきたわけであるが、このわがままの學生がその他の食べ物を食べる度に、「こんなもの」とか「よくこんなものを食べてるなあ」とか云つた言葉を吐き出し、私には聞き苦しかつたが、必ずしも肯綮を外れてゐるわけではなかつた。日本人客のためにわざわざつけてくれてゐるらしい御飯は外米に似てゐたし、青野菜といへば色あせたわづかの豌豆くらゐで外になにもなく、珈琲につけて出す砂糖は日本の戦時中の砂糖を想起させ、さういつた種類の食物から醸し出す感じはとにかく貧しいといふことであつた。しかしヨオグルトは北海道を除いては日本で口にすることの出来ないもので、肉類魚類も日本のとそれほど懸隔のあるものではなかつた。これも後で知つたが、船の食事はやはりシベリアの汽車や飛行機の中の食事と比べれば論に及ばず、ハバロフスクやモスクワの食堂で食べたのと比べても上質のもので、それを船酔のためにほとんど放棄してしまつたのは残念といふより外なかつた。

食事を終へ横甲板を歩いて受附の前を通ると、キウウパイのやうな顔をした受附の露人が私の顔を見ていきなり「あゝもう良くなりましたか。心配しました」と、いくらか抑揚の變つた日本語で話しかけてきた。私は驚いて咄嗟に「すつかり船に酔つてしまつて、今はじめて食事をしてきました」と云ふと、露人は「はじめてですか」とけげんさうな顔をして問ひ返した。なるほど露人のいふやうに

私が船で食べた食事はこれが初めてではなく二度目であり、お茶を入れれば三度目であるので、私も訂正せざるを得なかった。「はじめて」を第二義的な意味の「やうやく」とするか、或は「船酔にかかつてから」を省略したとするかすれば私の言葉通りでいいわけであるが、それを露人に説明するのは困難だったからである。しかしこの露人の投げかけた言葉で、ロシアは常に非情の國家であり、病身の私はあたかも捕虜になつた高田屋嘉兵衛のやうな心情でソ聯船に乗込まねばならず、病氣が悪化しても一人で一途に船室に寝てゐるほかないと思つてゐた心が俄かにほぐれてゆくのが感じた。

船室の放送の男聲はこの露人が放送してゐたので、後日日本語の巧なアメリカ人の船客が變な日本語と評したさうだが、そのアメリカ人の方が巧すぎたのである。もう一人女性の聲が時々替つて放送したが、この方はどの人が放送してゐるか最後まで分らなかつた。

二月二十八日 月曜

六時四十五分に起床し、急いで後甲板に行つた。運動着を着た日本の男女二人が體操をしてゐる。後尾に立つて四方を見ると島影一つ見えない日本海に出てゐて、東方の水面に一面霧が立ち、そこちやうど太陽がのほりはじめてゐる。太陽ははじめ光のない白い圓板として少しづつ頭をのぞかせ、水平線を離れきつてかなり登つたときに初めて光を放つて球體として私の眼に映じた。甲板上潮風に吹きさらしになつてゐてもそれほど寒くなく、私は出帆以來このとき初めて氣分の爽快を覚え、旅に出たといふ楽しい實感が湧くのを感じた。副腎皮質ホルモンが完全に效を奏して今日は蕁麻疹は

一つも出現せず、懸念してゐた日本海の冬の波濤が三陸海岸よりもかへつて静かであつた。しかしこの四月にベルリン・フィルハーモニーを引率して來日し、ベエトオヴェンの全交響曲を連續演奏するカラヤンのことが念頭に浮んで、この春は日本にゐた方がよかつたのではないかといふ一抹の寂しさが胸をかすめた。體操をしてゐた運動の選手はいつの間にか十數人になつて、繩飛びなどの軽い運動をしてゐた。

朝食も中食も今日は人並みに食べたが、胃の工合がまだ恢復してゐず、パンはほとんど食べる氣がない。中食を食べ終つて我々の卓にいつも給仕にきてゐた肥満したあから顔の女に、「どうもいろいろありがたうございました」と日本語で禮を云つて歐風に握手すると、女はにつこり笑つて早口の日本語で「どいたしまして」と云つた。

午後一時過ぎ前方の海を蔽うてゐる霞の中に雪のはだらに積んだ山々がかすかに見えてきた。まざれもないシベリアの沿海州であつた。山々は雪谿のみ白く浮上つて見え、それ以外はまだ霞の色と區別がつかなかつた。西方に白くかすんだ太陽が傾き、東方は水平線に平な雲が浮んでゐて、あたかも水平線上から雲が湧き卷き、海上をこちらに轉がつてくるやうな觀を呈してゐた。我々の後方から我々の船とおなじく白い船體をしたソ聯船が一隻、我々の船を追跡するやうなかたちで姿を現してゐた。

船は次第にシベリア大陸に近づき、沿海州に沿つて南下して、尖つた山が現れてすぐかくれ、山々がさかしく海に落入つてゐる海岸、段丘の海岸などが現れてきたが、いづれも人煙のとだえた自然の